

# Richard III 試論

—心の鎧—

相 原 信 彦

## はじめに

シェイクスピアの作品を読んでいくとき、いつも心に止めておきたいことがある。そのことは彼の作品を解釈する時ばかりでなく、文学作品と接する人であればたいは心することであり、敢えてここで説明するまでもないことかもしれない。が、それを承知のうえでやはり一言しておくことにする。

「シェイクスピアは何が言いたいのか。」陳腐な疑問かもしれないし、正確な答えなど出すことは出来ないのかもしれない。日記はもとより、個人的な資料など殆ど残されていないことは余りにも有名であるが、最近、このことは著者の勝手な思い込みではあるが、これはシェイクスピアの私達への挑戦であるように思われ出したのである。彼が生きたエリザベス朝の同時代の作家との比較や、背景となる歴史的な事実、宮内庁一座の座付き作家兼俳優としての彼の立場、『ソネット』をはじめとする生涯において彼が生み出した作品の細かい検討による解釈。同時代の哲学。例えば、マキャベリの影響。種本との比較。確かに、そのような研究を通して初めて、彼の「本当」の姿に近付くことが出来るのかもしれない。しかし、「本当の」姿とはいったいどういうものなのか。

*King Richard III* という作品がある。批評史をざっと見ただけでも、

コールリッジやダウデンのいわゆる「性格批評」に始まり、当時の歴史観を基礎としてシェイクスピアの作品を分析した E. M. W. Tillyard。その他代表的な批評を挙げて、Lily B. Campbell, *Shakespeare's 'Histories'*, Irving Ribner, *The English History Play in the Age of Shakespeare*, そして A. P. Rossiter, *Angel with Horns* などがある。ということは、「性格批評」が批判され、「歴史批評」が生まれ、それも不十分で次の批評方法が生まれて来たのは、この作品、ひいては彼の「史劇」は、読み手の側にある程度の自由な味わい方を許すということではないか。なにも、エリザベス朝の歴史観に束縛される事なく、シェイクスピアを『同時代人』とまでは言わなくても、もっと「私」の問題として接することも許されるのではないか、と思えるようになった。それが果して「本当」のシェイクスピアに接することになれるのかどうかは自信がないし、それどころか逆に彼の真意から遠ざかる結果に終わるだけかもしれないという不安は残るが。

シェイクスピアの作品、主に悲劇、を「演技」という観点から考えたことがある。それは、彼の作品が「演劇」というジャンルに属するからではなく、作品に登場する人物たちが何らかの形で自分に与えられた役割を「演じて」いるように見えて仕方なかったからである。そして、そのような人物を眺めている観客、又は読者の一人である私自身も自分の人生で色々な役割を、好むと好まざるに拘わらず演じているのではないかと思われたからである。

人が何かを「演じる」にはそれなりの理由がある。ハムレットは狂気を演じることによって父親の復讐を果そうとしたわけだし、『ヘンリー 4 世』において王子ヘンリーがフォルスタッフ達と放埒の限りを尽くすのも後の効果考慮してのものであった。しかしながら、こうした「演技」といふならば「意図的演技」であり、ある種の精神的葛藤はあるにせよ、演技している自分を自覚しているだけ、徐々に演技せざるを得ない状況に追い込まれていったマクベス程の悲劇性はない。本論においては、リチャードの演

技の意味をシェイクスピアの他の劇と比較しながら考えていくことにする。

## 本 論

*Richard III* には興味深い人物たちが数多く登場するが、その中でも主人公リチャードと後にヘンリー7世になるリッチモンドが面白い。その他、リチャードに口説かれ彼の妻となるアンをはじめ、数人の女性たちが果している役割もシェイクスピアの作品の中では興味深いものがあるが、その点に関しては別の機会に記述したいと思う。

リチャードのイメージは劇の中でいろんな人物を通してしつこいくらい私達に植え付けられるが、まずは極めて印象的な冒頭での本人の科白を試みよう。

Now is the winter of our discontent  
Made glorious summer by this sun of York;  
And all the clouds that lour'd upon our house  
In the deep bosom of the ocean buried.  
Now are our brows bound with victorious wreaths,  
Our bruised arms hung up for monuments,  
Our stern alarums chang'd to merry meetings,  
Our dreadful marches to delightful measures.  
Grim-visag'd war hath smooth'd his wrinkled front:  
And now, instead of mounting barbed steeds  
To fright the souls of fearful adversaries,  
He capers nimbly in a lady's chamber,  
To the lascivious pleasing of a lute.  
But I, that am not shap'd for sportive tricks,

Nor made to court an amorous looking-glass;  
I, that am rudely stamp'd, and want love's majesty  
To strut before a wanton ambling nymph:  
I, that am curtail'd of this fair proportion,  
Cheated of feature by dissembling Nature,  
Deform'd, unfinish'd, sent before my time  
Into this breathing world scarce half made up—  
And that so lamely and unfashionable  
That dogs bark at me, as I halt by them—  
Why, I, in this weak piping time of peace,  
Have no delight to pass away the time,  
Unless to spy my shadow in the sun,  
And descant on mine own deformity.  
And therefore, since I cannot prove a lover  
To entertain these fair well-spoken days,  
I am determin'd to prove a vaillain,  
And hate the idle pleasures of these days.  
Plots have I laid, inductions dangerous,  
By drunken prophecies, libels, and dreams,  
To set my brother Clarence and the King  
In deadly hate, the one against the other:  
And if King Edward be as true and just  
As I am subtle, false, and treacherous,  
This day should Clarence closely be mew'd up  
About a prophecy, which says that 'G'  
Of Edward's heirs the murderer shall be—  
Dive, thoughts, down to my soul: hence Clarence comes.

リチャードの科白を考える前にシェイクスピアの他の作品を少し見てもよい。

リア王の「嵐」の場面におけるこの科白。

Unaccomodated man is no more but such a poor,  
forked animal as thou art.  
Off, off, you lendings! Come on, be true.

リアの悲劇は、王としての役割を演じるために必要な道具を総て娘達に譲っておきながら、自分に出来るのは権力をもたない王としての役割を演じるだけであるという自覚がないことから起こっているものである。いわゆる「王国分割」の場面で、彼にすれば余りにも非人間的なコーディリアの態度に激怒した彼は、最初に約束していた国土ばかりか、王という肩書を除いて王に付随する、もっと正確な言い方をするならば、実質的に王であるために必要な権利を総て上の二人の娘に手渡してしまう。この時点で彼にはもはや王としての権力はない。にもかかわらず、彼はコーディリアに自分の権威に泥を塗られたと思っているために、以前にもまして権威を誇示するために王であることを強調しようとする。それはまるで会社の社長をしていた者が、その職を退いても意識のうえで、社長であり続けようとして失敗するようなものである。上に引用した彼の科白は「耐え難い」苦しみを味わった彼が、それに耐えられなくなった後で、狂気の中で乞食に身をやつしていたエドガーを見て言ったものである。『リア王』の象徴的場面と言える。この芝居の解釈の方法は、シェイクスピアの他の芝居同様いろいろある。その一つが、価値観の対立という観点からの解釈の仕方である。人間の「内面と外面は乖離」するか否か。人間の外面はその人物の内面を映し出す鏡だと考えて疑わなかったリア。それを否定する形でエドモンドが登場するこの芝居において、いずれの側が勝利したのかはここ

では問わない。しかしながら、リアの上の科白はそうした対立をも超越した哲学的到達点と考えられることも多い。確かに、'lendings = superfluous articles not given by nature' を取ってしまった人間は「裸の二本足の動物に過ぎない」のかもしれない。王の地位、名声、権力を lendings と言えること自体が、ある意味で、すでに人間性に対する優れた洞察と言えるのかもしれない。王と乞食の存在は人間の社会的存在を階級、階層という側面から見たときに、対照的な所に位置する存在である。だが、王も乞食も、卑近な言い方が許されるならば、裸になれば同じ存在に過ぎない。この科白を耳にして当時大笑いした者もいれば、自分の身分に一抹の不安を感じた者もいるかもしれない。平土間の客など拍手喝采したかもしれない。しかし、仮に私達が「人間とは?」と自問した時、こんな答えて満足することが果して出来るだろうか。借物を絵でとっばらってしまうれば、確かに人間は「裸の二本足の動物」に過ぎないのかもしれないが、人間らしさとは別問題なのではないだろうか。自分が「演技者」に過ぎないことを知らず、娘たちと言い争いを続けるリアに最も親しみを感じるのには、そこに自分の中にもある人間の愚かさ、弱さを発見するからであろう。

別の演技もある。

自分の行動に何らかの理由を付けてそれを正当化する。その理由がいかに論理的におかしくてもそうせざるを得ない理由がその人物にある場合も考えられる。演劇をしている人物がいたとする。いつか舞台上上がることを夢見て普段から発声練習をしたり、ダンスの稽古にも余念がない。せりふの言い回しも自他共に認めるくらいうまい。いよいよキャスティングの発表。主役は自分ではない。どうしてあんな奴が主役になり、自分にはこんな役しか与えられなかったのか、と不満を抱く。ところが、まわりの役者からは慰めの言葉は一言もかからない。彼は思うかもしれない。「奴らには人を見る目がないのだ。」こんなことはこの俳優ばかりではなく日常茶飯事と言ってよい程私達の身によく起こることである。そんな場合、私

達は自分に与えられた「役割」を、不満を胸に抱きながらも演じ続けるか、自分が望む役割を取った他人をいろんな手段を講じて押し退けるか、自分に与えられた役割を捨て全く違う役割を探すか、ともかくもいろんな方法でその不満を取り除こうとするはずである。「裸の二本足の動物」に過ぎない人間はいろんな衣装を選び生活しているのである。その衣装が果してその人物にぴったりしているかどうか、それは分からない。人間はその一生の間に数多くの衣装を身に纏うことになる。その衣装を大切にするか、破り捨てて、他人の衣装を盗んだり、新しい衣装を探すことだってあるかもしれない。だが、所詮借物は借物に過ぎない。どんなにあくせくしたところで、人間の一生なんてたかが知れている。その意味では、リアは卓越した人間観を示しているのかもしれないが、逆に、借物にしか過ぎないのにそのことで悩んだり、人を陥れたりするのも人間ではないか。先に引用したリチャードの独白は、視点を変えて眺めるならば、これ以上人間らしい科白はないとも言えるものである。

シェイクスピアの英国史劇はバラ戦争を扱ったものである。リチャードの科白の最初の部分はそれを示す。ヨーク家の勝利によって、つかの間のものにせよ人々は勝利の味を噛みしめている。兵士たちは、武具を脱ぎ捨て、淫らな踊りに興じている。しかしながら、リチャードはそのような輪の中に入ることが出来ない。彼はその理由を数多く挙げているわけであるが、それは一言で言えば、不具ということになる。史実として彼の具合がどの程度あったかは別にしても、少なくともこの芝居の中では、彼自身によるものばかりでなく、他の者たちによっても言及されており、この1幕での科白は誇張されたものではない。が、果して彼がそのことでどれほど劣等感を抱いていたかは話が別である。「色男となって、美辞麗句がもてはやされるこの世のなかを楽しく泳ぎまわることなどできはせぬ」から「悪党となって、この世のなかのむなしい楽しみを憎んでやる」と彼は決意する。一見すると、不具という原因があって、悪党になるという結論が

出ているかのようにも見えるが、果してそうであろうか。「世の中には色々な苦しみ、悩みを抱きながらそれでも出来るだけ明るく生きようとしている人が多くいる。何も劣等感を抱いているのはお前だけではない。だから、そんな理由など話にもならない。」などと言うつまりは毛頭ない。『オセロ』の中で、イアーゴがオセロを畏にはめていくとき幾つかその理由を挙げているが、それでもイアーゴの動機付けを‘without motivation’と説明する者もいる。オセロが自分の妻エミーリアとあやしいとか、昇進について不当に扱われたというのは、とりあえずの理由であって、自分の行為を正当化するための言い訳に過ぎないということからの説明であろう。しかしながら、人間の行動とその動機にいつも釣り合いが取れているとは言えないのではないか。ほんのささいな動機からとんでもない事をしでかすことは、すこしでも自分の行為を振り返ってみれば理解出来ることであろう。逆もあるかもしれない。動機にもならない動機付け、行為と理由のアンバランス。人間が衣服を纏い、その衣服に見合う行動を取ろうとするように、人は心に衣服を、大袈裟な言い方が許されるならば、心を鎧で守りながら生きているのではないか。衣服を脱ぎ捨て裸で外を歩いているところを人に見られると恥ずかしいように、裸の心は自分で見るのも怖いような気がするのではないか。自分の心を何も飾らず正直にさらけ出すことの恐ろしさ、おぞましさは誰にも経験があるものである。人に遠慮する事なく有りのままの自分の気持ちを吐露することの出来るはずの日記でさえも、無意識のうちにしろ、どこかでそのような自分の姿を見ている他人やもう一人の自分を心で感じ、知らず知らずのうちに服を着せてしまう。これは日記、または日記文学なるものを私が素直に受け入れられない理由の一つであるが、それほど人は赤裸々に自分の心をさらけ出すことに不安を抱くものである。

マクベスの場合、魔女たちの予言が彼が心に着せた鎧だった。魔女たちの予言は少しずつ実現されていっているように彼には写る。しかし、グラームズの領主からコーダーの領主へ、そして王への階段を上るに連れ

て、自分が今上って来た階段は取り払われていて、後戻り出来ないことに気付く。彼が国王殺しという不正な手段で手に入れた自分の地位の脆さにいつの段階で気がついたのかは分からないが、いかに空しいものであろうとも、国王という服と魔女の予言という鎧を見に纏いつつ、幻の階段を上って行く以外に彼の進むべき道は残されていないのである。ただし、死を前にしてマクダフとの戦いに望んだ彼の科白には心を守ってくれるはずの鎧の脆さを認識した人間の逞しさと、それとは矛盾するかもしれないが、人間がもっている悲しさ、どうしようもない救いの無さを感じずにはいられない。気が付いてみると舞台に上らされており、必死の思いで国王の役を演じている自分。その場を離れたときの空虚さに対する痛烈なやり切れなさ。

私は人間がいろんな意味で勝負に敗れたとき、またはその結果死んで行こうとするときの科白に興味がある。『マクベス』を読んだときも途中の、‘Life’s but a walking shadow’ が人生に対する一つの深い認識を示すものである気はした。しかし、言葉は悪いが、生きていくことに絶望しながらも、もっとじめじめした、どくどくと血の流れる音が聞こえて来るような、つまり生きていることに執着するような人間の性を感じさせてくれる次のマクベスの科白がいい。

I will not yield

To kiss the ground before young Malcolm’s feet

And to be baited with the rabble’s curse.

Though Birnan Wood be come to Dunsinane

And thou opposed, being of no woman born,

Yet I will try the last. Before my body

I throw my warlike shield. Lay on, Macduff;

And damned be him that first cries, ‘Hold, enough!’

開き直り、自暴自棄と取れなくもないが、変に取り澄ました哲学的名言よりもいい。もはや、魔女の予言を心の鎧として使う必要もない。それどころか、予言を一種の水先案内人とし、自分の意志とは関係無く自分の道を進むことも拒否している。‘Yet I will try the last.’ 「心の鎧」という言い方をしたが、魔女の予言は彼にとって、その鎧は彼を守ってくれるものでは決してなく、その重さに必死で耐えて行かなければならない程の足枷となっている。「鎧」は王座への階段を上るときには、「良心」を下から引っ張る障害となり、王座を滑り落ちるようになると、必死で落ちないようにする彼を引きずり落とす役を果しているに過ぎない。

リチャードにとって、マクベスの予言に当たるものは何か。

「自我」という観点からこの芝居を解釈する方法がある。最初に引用したリチャードの科白。不満の冬はあくまで「我々」の不満であり、家は「我々」のものに過ぎず、勝利の花輪が飾られるのはあくまでも「我々」の額に過ぎず、恐ろしい進軍の足取りは「我々」の足取りである。それに対して、色恋に向いていない体をしているのは「私」で、鏡を見てうっとりするように出来ていないのも「私」。「私」はひどいびっこをひく。五体の均整もなく、未熟児として、出来損ないのままこの世に送り出された「私」。そばを通るだけで犬がほえる。そんな醜い体つきの「私」だから、この平和な世の中では自分の影を相手に歌を口ずさむしか時の過ごし方はない。「美辞麗句がもてはやされるこの世のなかを楽しく泳ぎまわることができない」から「悪党となって、この世のなかのむなしい楽しみを憎んでやる」と彼は結論を出す。不具の彼がそのことに劣等感を覚え、反動として自分をいわばのけ者にしている世の中に仕返しをする。悪いことをするのは、自分が不具であることが理由であり、そんな自分を受け入れてくれない世の中が悪いのであって、そうでなければ自分は悪党などになる必要はない。

不具であることは非常に視覚的であって、マクベスが耳にする魔女たち

の予言とは劇的効果は異なる。マクベスはいわば魔女の予言に引きずられる形でそれまでは意識していなかった、少なくとも自分では気付いていない野心を意識させられて行く犠牲者でもある。同時に、この芝居はどんな小さなきっかけでも人間は大きく変わり得る可能性を示した作品でもある。『マクベス』という劇を見た観客が覚える戦慄は、主人公マクベスの残虐さではなく、逆に人間の弱さ、運命にいと簡単に翻弄される人間が背負っている残酷な宿命みたいなものではないかと私には思われる。王位を手に入れるが、その地位は、初めからはっきりとした意志の元到手に入ったものというよりも、手に入れさせられたものに過ぎないことを一番理解しているのはマクベス自身にほかならない。リチャードの場合はどうなのだろうか。

小田島雄志氏はリチャードには「悪の魅力」があり、理由の一つとして、「意志を貫徹するひたむきさ」を挙げている。リチャードに「逆説的なさわやかさ」を感じるか否かは別としても、この場合、「意志」とは「悪党となってこの世の空しい楽しみを憎むことになるだろう。それとも、継承権から言えば自分に回って来ることはありそうにもない王位を手に入れようとする彼の心に芽生えた野心のことか。アンへの求婚も、兄クラレンス公爵をいわれない中傷によって陥れ、ロンドン塔へ幽閉し刺客を使い暗殺させたのも、エドワード王の幼い王子達が庶子であるとの噂を流し、摂政の地位からやがて王位を手に入れて行ったのも、彼の野心からのものであることを否定するつもりは毛頭ない。しかしながら、歴史上の事実、評価は別にして、彼にとって王位、王権というものがそれほど価値があったものとはどうしても思われないのである。つまり、自分がその夫を殺したアンへの求婚も、王位を手に入れることも彼にとっては目的そのものではなく、困難なことに挑戦し他人とは違う自分の存在、言い換えれば能力を証明するための手段に過ぎないのではないかと思われて仕方がないのである。ゲームと言い換えても構わない。ゲームの楽しみ方はその目的に応じて色々ある。結果は別問題で、その過程そのものを楽しむのも目的

の一つかもしれない。勝利した時の景品が目的の場合だってあるだろう。が、景品、賞品はリチャードには意味のないものであった。王位は景品の一つであり、魅力あるものかもしれないが、彼にとって大切なのは景品そのものではなく、景品を手に入れたという事実なのである。なぜならば、ゲームにおける勝利は彼の能力の勝利を意味するものに他ならないからであり、それこそまさに彼が証明して見せたかったものだからである。

劇中至るところにゲームを楽しむ彼の姿が見られる。特に、アンへの求婚の場面と市長をはじめ一般大衆から望まれて王になるのを嫌々ながら引き受けているようにみせる所など、その最たるものと言って良からう。彼にとって、女性に愛を告白し、くどき落とすことは 'lascivious' な行為であり、彼の最も嫌う行為であるが、ここで彼は愛を告白している訳ではない。王位につく野心を実現するためのステップの一つであると解釈することも勿論可能ではあるが、執拗な言葉のやり取りは、王位への執念を表すものというよりも、女性に求婚する役目を与えられた役者がその演技を楽しんでいるとでも言った方が的を得ていると思われる。バックingham相手のやり取りなどは笑いを禁じ得ないところである。くそまじめな顔をして王への要請を断って見せる所など、自分の演技に酔いしれているリチャードの姿が浮き上がって来るだけで、この劇が裏切り、人殺し、そして悲惨な血の匂いに満ちている作品であることを忘れさせてしまう程である。

マーガレットはリチャードのことを 'hell's black intelligencer' と形容している。確かに、悪事に悪事を重ねて行く彼の姿は「地獄の回し者」というイメージそのものかもしれない。しかしそれだけではこれほど魅力的な人物は生まれえない。ヤン・コットは *Shakespeare Our Contemporary* の中で、シェイクスピアの史劇は『ジョン王』を除いて、14世紀から15世紀の終わりにかけて続いた英国の王位を求める争いを描いており、総ての史劇が王位をめぐる争いで幕を開け、王の死と新しい王の誕生で終わる 'the Grand Mechanism' の世界であると説明している。王が入れ代わっても、新しい王は前の王と同じ働きをしているに過ぎないことを示すこと

によって、ヤン・コットは世界の秩序に組み込まれているに過ぎない人間の姿をシェイクスピアの史劇の特徴だと説明しているのである。そうした世界の構造・秩序は故ヘンリー6世の未亡人であるマーガレットによって間接的にしろ語られている。

I called thee then vain flourish of my fortune;  
I called thee then poor shadow, painted queen,  
The presentation of but what I was,  
The flattering index of a direful pageant,  
One heaved a-high to be hurled down below,  
A mother only mocked with two fair babes,  
A dream of what thou wast, a garish flag  
To be the aim of every dangerous shot;  
A sign of dignity, a breath, a bubble,  
A queen in jest, only to fill the scene.

この世における人間の役割が「場面を埋めるだけ」の存在であるとすれば寂しい限りではあるが、そうした解釈は20世紀の無声映画にも見られるものであり、シェイクスピアがどこまで意識していたかは別にしても、十分解釈可能なものである。ただし確実に言えることは、リチャードが‘the Grand Mechanism’の中でいわば他人と同じように一つの役割を演じるだけでは満足出来ず、あくまでも「自己」の存在意義に執着しようとしたことではないだろうか。ヤン・コットはリチャードが、彼に雇われた殺しやと共にこの劇の中で世界を有りのままに受け入れていると述べているが、客観的に世界を動かす大きな力を意識すると共に、自分だけはその中から抜け出そうともがいていたのではないか。自分の個性を、そして自分の力を証明するためには、王になるだけでは不十分で、歴代の王達とは違いその王権を別の人間に奪われるようなことがあってはならなかったの

である。彼が用意周到に王権を手に入れようとしているように映ったり、また逆に場当りのいわばゲームを楽しんでいるように映ったりするのも、彼の心の中に相反するとは言えないまでも、自分を取り巻き飲み込みそんな世界と、その中で生きている自分の精神的な戦いが反映されたものである。リチャードの

A horse! A horse! My kingdom for a horse!

は余りにも有名な科白であり、こう言って死んで行くリチャードの最後を松元寛先生は「悲劇とよぶべきなのか、それとも喜劇とよぶべきなのか」と書かれている。リチャードは敗北したのである。ただ、反乱軍のリッチモンドに敗北した訳では決してなく、'one of the kings' 'one of men' ではないことを示すことが出来なかったという意味での敗北である。そんなリチャードにとって王国は何の意味ももっていない。王国と馬一頭を交換しようとするなど馬鹿げた行為かもしれないが、自分が歴史の巨大なメカニズムを動かしている交換可能な歯車の一つではないことを証明出来なかった彼にとって王権・王国は全く価値の無い存在でしかあり得なかったのである。リチャードの敗北をピーター・ミルワード氏のように全く違う角度から解釈することも考えられるが、そうした勧善懲悪的な解釈ではリチャードの人間臭さは伝わって来ない。そのことはリッチモンドを見れば一目瞭然である。彼の最後の科白から、英国の栄光が再び戻って来ることに對する願いと愛国心を高揚させようとする意図はくみ取れるが、観客にはそれが極めてはかないものにしか映らない。それどころか、ヤン・コットの言葉を借りるならば、また新しい王が誕生し、同じ歴史が繰り返されるだけではないかという不安がよぎるだけに過ぎない。リッチモンドの勝利にどれほどの観客が拍手を送ったのかは分からない。しかしながら、リチャードの残虐な人殺しをしてまでも「自己」の存在意義を確かめようとした「演技」を見せ付けられた私にとって、リッチモンドは歴史に操られ

ている人形に過ぎず、人間的魅力は全く感じられない。

## 結 び

社会生活を送っていくうえで人は色々な役割を演じなければならない。そしてともすると「演じている」ことを意識しなくなり、本来の自分の姿と区別出来なくなる。それと共に、本当に自分が演じてみたい役割を手に入れる勇氣も無くしてしまうことが多い。内面的葛藤に見舞われたとしても、社会的責任や義務という口実、言葉を変えれば鎧で、自分を覆ってしまう。それは外的な攻撃から自分を守るというよりも、むしろ自分をさらけ出すことから生じる危険から自分を守るための道具である。「鎧」が合わなくなった時、人は別の鎧を探すか、多くの人のように「鎧」に体を合わそうとする。無理があるにせよ、決して鎧を手放すことは考えないようにする。リチャードは自分に与えられた「鎧」を身につけ、それにふさわしい演技を続けて行くことを拒んだ人物である。英国史を扱った劇であるという枠組を忘れ、個人的なレベルでこの劇を見るのが許されるならば、これほど痛快な劇は多くはない。

## 参考文献

- 1 松元 寛著『シェイクスピア 全体像の試み』（溪水社）
- 2 大山俊一著『シェイクスピア 人間観研究』（篠崎書林）
- 3 小田島雄志著『シェイクスピア劇のヒーローたち』（日本放送出版協会）
- 4 小田島雄志訳『リチャード三世』（白水社）
- 5 William Shakespeare, *Richard III* (New Penguin Shakespeare)
- 6 William Shakespeare, *King Richard III* (The Arden Shakespeare)
- 7 E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's History Plays* (Chatto & Windus)
- 8 Lily B. Campbell, *Shakespeare's 'Histories'* (Methuen)
- 9 Irving Ribner, *The English History Plays in the Age of*

*Shakespeare* (Octagon Books)

- 10 A. P. Rossiter, *Angel with Horns* (Longman)
- 11 Yan Kott, *Shakespeare Our Contemporary* (Methuen)
- 12 Antonai Fraser ed, *The Lives of the Kings and Queens of England* (Futura)